

両洋高等学院高等部は生徒が集まらないので、ほどなく廃止して中学一本にしていたのですが、一般公立の中学校と同等の資格があるとして文部省の認可を受けていたので、校舎はバラックでも入学志願者は多かったのです。しかし兄は自分の教育観から、志願者が百人あっても十人ぐらいしか入れないというときもあったのです。経営ということを一切考えないのです。そのころ立命館大学の創立者中川小十郎さんが経費が足りないで名刀を質に入れたとかいうことが耳に入るし、また講をつくったとかいうことも聞こえてくるので、私もすぐ両洋に講をつくったこともあったのです。また、立命館大学と同じ程度の大学はつくって見せるといつていたのでした。それは生徒が大勢志願して来るので、どんどん入れて学校を大きくすればよいのですから、大学にするのは何でもなかったのです。しかし、兄はそういうことには気が向かず、量的には大きくならず、質的には自分の「要体教育」を仕込んであちこち実演させて誇ったものでした。この要体教育が全国に行われるようになったら、日本の教育は一大進展して世界一になるところだったのに、これが埋もれようとしているのは、誠に残念です。